

○那谷屋正義君 民主党・新緑風会の那谷屋正義でございます。

三名の方々から新潟中越地震にかかわる貴重な御意見、御提言等を賜りましたことに対して、会派を代表して厚く御礼を申し上げます。同時に、中越地震の犠牲となられた方々への衷心よりのお悔やみと、被災者の方々に対する心からのお見舞いを申し上げます。

民主党は、去る十九日に自然災害対策緊急集会を開催し、新潟県を始め関係者の切実な要望等を拝聴してまいりました。降雪の時期を控え、いずれも緊要性の高いものと受け止めさせていただいたところでございます。この認識に立ちつつ、就任早々本当に大変な御苦労を負うことになった泉田知事の思いのたけをお尋ねしたいというふうに思っています。

先ほど、被災者支援のための様々な施策ということで県の独自の制度を設けられたということ、そして国に対して様々な運用あるいは特別法をとという御要望、そしてその中身については御質問もあり、お答えをいただいたところでございますが、個人的には、こうしたことは政府が決断にちゅうちょする場合には議員立法としての対応も必要ではないかというふうに考えているところであります。

さて、被害額三兆円に及ぶ復旧・復興は、豪雪地帯ゆえの困難性を帯びざるを得ないというふうに思うわけでありますが、降雪前、降雪期、そして雪解け後、それぞれの時期に応じた施策を、文字どおりタイムリーに打っていく必要があるのではというふうに素人ながらも考えるところでございますが、学ぶべき先例等もない中で、知事のお考え、展望等おありでしたらお聞かせいただけたらと思います。

○参考人（泉田裕彦君） まず、雪に対する対応なんですけれども、もう時間がありません。山の上の方では既に雪が降り始めている。これがいつ里に下りてくるかという状況になっております。したがって、今時間との闘いでございます。

一番最初にやらないといけない、雪の降る前にやらなければいけないこと、これは基盤となる住宅を確保すること。今回は仮設住宅に加えまして、アパートの借り上げ、それから一時的ではございますがコミュニティーセンターみたいなところとか、それから旅館の利用というのも可能という、いろんな試みをやっておるところでございます。必ずしも地域から離れたくないと、これは学校の都合、仕事の都合、それから苦しみは皆と一緒にやりたいというコミュニティーの連帯感等あって、なかなか一家族だけ離れて他県に行くとかほかの地域に行くということができないような状況になっているので、実効性が難しい部分はあるんですけれども、まず住宅の確保、こういったものに全力を挙げているところです。

それから、雪が降ると工事ができないところがありますので、復旧できるものとはにかく雪が降る前に、これは田畑から始まって道路、それから消雪パイプというんですけれども、道の真ん中に交通を確保するために地下水を流す仕組み、こういったものの修繕に全

力を挙げているところです。

雪が降ってから、これはとにかく雪かきをしないと、雪下ろし若しくは雪掘りなんですけれども、しないと住宅がつぶれてしまう危険がある。特に、危険地域の皆さんには避難勧告が冬の間継続をする可能性が高いという状況になっていますので、交通網を確保して何とかして雪下ろしをしないと、二次災害で現在残った家自身がもう一度つぶれてしまう危険があるということなんで、交通網の確保。これは市町村と協議をしないと自宅まで行けないと、県道だけでは済みません、国道だけでは済みません、除雪計画を策定をしているところでございます。それから、雪下ろしをしてくれる人手の確保ということも考えなければいけないのではないかとこのように考えています。

雪が解けた後、これまた恐ろしいことに大量の雨が一気に降ったと同じ状況になるわけです。土砂災害の発生の危険というのも大変危惧しているところです。雪解けのときに、どういったふうにして危険地帯、特に芋川とか自然ダムが、天然ダムが、震災ダムができていく地域の下流に当たられる方、それから、亀裂が入った山が裏庭から崩れてこないのか、こういったところの情報をしっかり提供をして、改めて土砂災害に遭わないような対策、これをやっていく必要があると。砂防関係の対応というのは今度は雪が解けてからやらなければいけない、そういう課題があると認識をしております。

○那谷屋正義君 ありがとうございます。

今回、様々な避難所として学校が多く利用されたというふうに思いますけれども、そこに避難所としての機能を求めるならば、やはりそれに十分に見合う財政支援が不可欠だろうというふうに思うわけであります。

しかし、現実を見れば、余りに心もとない事例がたくさん見受けられて、中越地震に際しても、被災住民から学校の体育館など広いスペースを確保できる施設開放をという切実な要望がありながら、老朽化等が甚だしいために、やむなく自己責任を求めた上で、雨露をしのぐ程度のもので開放に踏み切る苦渋の選択を下した例もあるというふうに聞いております。

ところが、新潟県の現状は、財政難の理由から、高校、障害児学校にかかわる耐震補強等については、今年度は、実際の工事はもとより、調査すら行われていないというふうにも聞いているところでございます。

今回の教訓に学び、新潟県においては老朽校舎の増改築や耐震補強をどのように進めたいというふうにお考えかどうか、その辺をお聞かせいただけたらと思います。

○参考人（泉田裕彦君） 今御指摘いただいた校舎のほかに、病院それから社会福祉施設、古い時代に建てられた耐震構造になっていない建物が数多く存在しているというのが現実でございます。

今回の教訓を経て、耐震構造であった建物って残っているんです。耐震構造でないところ

ろ、これ応急補修でもう一度使うという可能性というのがあります。御指摘のような財政難と、県だけではどうしようもない部分がございます、市町村だけではどうしようもない部分。これは応急的に使うということになる可能性がある。私は避けたいと思っています。できれば、単なる応急補修ではなくて、耐震構造になっていない病院、これは建て替える必要があるのではないかと考えています。

ただ、どこまでできるのか、これ予算との兼ね合いの中でしか進んでいかないわけです。本当、忍びないのは、耐震構造でない病院を応急修理をして、そこにまた入院患者が戻ってくると。福祉施設にも、耐震構造でない、なっていないのが分かっているところでまたお年寄りが戻ってくる。耐震構造になっていないのが分かっているながら、またそこで生徒さんが勉強しなければならない、そういう状況があるわけです。

できればこれをなるべく早い段階で解消したいと思っています。これは新潟県だけの問題でないと思っていますが、何らかの、特に心の問題もあります。耐震構造になっていないと分かっているながら入院しなければいけない人たちの心というのも考えていただいて、是非御支援いただければというのが正直なところでございます。

○那谷屋正義君 今お答えいただきましたように、本当に新潟だけの問題じゃなくて、本当に全国、とにかく地震の多いこの国としては本当に必要なことだろうというふうに思いますけれども、阪神・淡路大震災の復興に際しまして重きが置かれた子供たちの心のケア、今、心のケアというお話もありましたけれども、体制の整備について、いわゆる復興担当教諭の採用、新潟県も早速文科省に申し入れたというふうに聞いておりますけれども、ただ、大学入試や就職問題など、高校生の置かれている現状を考えるならば、小中学校の義務教育段階だけでなく、高校段階も含めた相談体制の一刻も早い整備こそが強く要請をされているというふうに思います。私も教育現場で働いてきた一人として協力を惜しむものではございません。知事の決意をお聞かせいただきたいというふうに思います。

また、同時に、授業の早期再開のみならず、学校の避難所機能を最大限発揮させることに全力で取り組んできた教職員が抱え込む心身のストレスは、これから顕在化するのではとの危惧も禁じ得ません。多くの教職員が我が身、我が家庭を顧みず頑張ってきたことはお分かりいただいているというふうに思います。

もちろん、教職員だけじゃなくて様々な方たちがそのように苦勞されているわけでありましてけれども、これらの役割も兼務してきた者や独居高齢者などに対し、ハード、ソフト、両面を備えたきめ細やかな相談体制も必要とされているのではないのでしょうか。これについても御見解をお示しいただければというふうに思いますけれども。

○参考人（泉田裕彦君） 委員御指摘のとおりだと思っています。特に専門家の先生からは、生徒さんたち、一か月をたってから影響が出てくるという警告も受けております。今、一番大事な時期だと思っています。遺漏ないように、万全な対策を取れるように精一杯頑

張っていきたいと思います。

○那谷屋正義君 是非お願いしたいというふうに思いますし、またこちらの方にも、できることを全力でやらしていただけたらと思います。

次に、目黒参考人にお聞きをしたいというふうに思います。

参考人の御持論は、今いろいろお話しただく中で、一にも二にも、とにかく事前対策の重要性にあると理解するところでございます。この目的、信念に基づく、住宅を始めとする構造物の耐震化こそが不可欠との御指摘は強い説得力があるのではないかというふうに考えるところでございます。

ところが、避難所の在り方一つを取っても、参考人の問題意識からすれば背筋に寒さを覚えずを得ない実態にあるのではないかというふうに思うわけでありますけれども、とりわけ、その多くが避難所機能を果たすことになる校舎や体育館の耐震、あるいは今お話しありました病院、耐震補強等の遅れが深刻であります。財政難を理由に、遅々として進まない学校施設等の耐震補強の早期かつ効率的な進め方について、お知恵を拝借いただけたらと思うところでございます。

また、参考人は、災害発生時における個々人の冷静、的確な判断力や行動力を養うためにも、災害環境イマジネーション能力の向上は必須の要件だというふうに強調してこられたところですが、防災教育の重要性も含めて御所見をお聞かせください。

○参考人（目黒公郎君） じゃ、お答えします。

公的な施設の耐震性の向上、これがうまく進んでいない、御指摘のとおりです。これも是非是非きちんと進めなきゃいけないわけですが、今進まない理由というのは、財政的な問題があってそれが進まないということを言われているわけですね。

これについては、私自身は、多くの方々に対しての情報開示と、それから、それをやっていないということが後でどれだけの問題を生むかということをお示しし、それも先ほど御指摘のあった災害イマジネーションに正につながるんですけども、それをやってこないことがどれだけのことにその後影響を及ぼすかということを出し、そこに例えば通っていらっしゃる生徒さんの親御さんにその情報を出しというようなことをしておくことがまず一番重要なんじゃないかと思うんです。今は、どういうことが起こるかという部分に関しての理解度が低いんですね。低いがために、その優先順位を高くできないでいるということが現状だと思います。その部分の理解度を高めるということが私自身は最初の一步だというふうに思っております。

それから、防災教育に関してですが、我が国ほどいろんな災害の多い国に住んでいる人々はいないわけで、そのときに、僕はよく言っているわけですけども、子供がおぎゃあと、赤ちゃんがおぎゃあと生まれたと。そのおぎゃあと生まれた子供が人生を全うするすべを教えることが教育だとすれば、これだけ災害が多い国にいて、地震を始めとする台風その

他の災害のメカニズム並びに防災のことを教えないでいて、義務教育なんて本当に言っているのかよというふうに思うのが私自身の考えです。

だとしたら、もう僕は極論を吐くけど、受験科目の主要科目になったっていいじゃないか、それぐらいのつもりでそれをきちんと推し進めることが、子供たちを守り、やがてその子供たちが大人になっていくわけです。そうやって社会の中心的なプレーヤーになって状況を変えていくということをしないと、何とも状況はお寒いという状況がずっと続くのではないかというふうに思っております。

以上です。

○那谷屋正義君 ありがとうございます。

一つだけ、視点を変えて。山古志村に象徴されるように、山間部では、道路が寸断された上に、携帯電話も全くつながらないなど、いわゆる孤立集落対策の重要性というものがある。今回ほど強く認識されたことはないのではないかというふうに思うわけでありませうけれども、この教訓を生かすための方策について提言等お持ちでしたら、お示しをいただけたらと思います。

○参考人（目黒公郎君） 孤立されている方々の問題というのは、幾つかのフェーズで考えなきゃいけないと思います。

まず一つは、建物がきちんとし、それが機能をしているという状況であれば、仮に孤立されている状況が数日間継続したとしても、その方々がそこで生活上の問題がないというようなことは実現できると思うんですね。その次に、コミュニケーションをどう取るか、それはまた別の問題です。

私が、この私のレジュメの一番最後にも書いておきましたが、今回の中越地震で一つ大きな問題として今の質問に関係して考えることは、低角傾斜地の斜面崩壊というものがあります。これは勾配が大したことない斜面なんです。従来の斜面崩壊の現象として危険な地域ですよというような定義から全く外れてしまう。こういった箇所が随分被災されているんですね。こういう問題は今後、新潟だけじゃなくて、破碎帯地域、地すべり地帯で地震が起これば確実に起こってくると思います。

これを、今回の教訓をきちんと学び、その傾斜だけじゃなくて、それに更に幾つかの条件が加わるということ今回のような地すべりが起こりますよというようなことを少なくとも事前にディテクトしておくというようなことがないと、今御指摘のような問題は今後もずっと起こってくるんじゃないかなというふうに思います。

以上です。

○那谷屋正義君 ありがとうございます。